

—市立雄勝病院の悲劇に学ぶ—

越智 元郎(愛媛県八幡浜市立 八幡浜総合病院 麻酔科)

1. はじめに

東日本大震災の後12年を経たが、震災の実態を新たに理解するさまざまな機会がある。演者は下記【資料】に示すNHKの2つの番組から強い衝撃を受けた。

2. 番組から学んだこと

番組Aにおいて、都道府県などが発表している津波の浸水想定区域にある高齢者施設数 3820、このうち震災後に開設された施設は1892（うち60%は1m以上浸水）に上る。これらの施設の入所者総数は5万人、うち自力で歩くことが難しい要介護3以上は3万人という。

番組Bにおいては、入院患者全員（40人）と職員24人が犠牲になった（津波に呑まれたのち救出されたのは4人）宮城県雄勝町の病院の大津波被災の実態が紹介された。

- 1) 住民P—雄勝病院に駐車したとたんに揺れ、直後に大津波警報。院外に出て来た患者・職員15~20人に「津波来るから逃げろ」。職員は「患者さんいるから逃げれねえんだ」と言って、戻って行った。Pは近隣住民の指定避難場所である病院の裏山へ逃げて生還。
- 2) 職員Q—訪問看護先において、車では帰院できなかった。歩いてでも帰院し、入院患者避難を手伝うべきであったか（その結果死ぬとしても）と自分を責める。非番であったのに病院へ行き死亡した同僚Rの家族に済まないと思う。
- 3) 非番であったのに病院へ行き死亡したRの家族—Rは患者や同僚に対する愛情から病院へ向かった。自分が親になった今は家族のために逃げると思う。自分の子どもには「まずは自分の命」と教える。
- 4) 食事を摂れなくなり入院し、津波で死亡した高齢Sの家族—避難に尽力してくれた職員に感謝。
- 5) 死亡した職員Tの家族—「逃げて構わない」というルールは作れないのか。他の家族から、Tがもし（救助に加わらずに）生き残ったら、周りや自分自身からの非難で一生苦しむと言われ、沈黙した。

3. 私の意見

- 1) 水難時に自力で避難できない患者・入所者を預かる施設は立地および避難の方策について真剣な検討を。
- 2) 水難時の職員の死が当然であってはならない。避難支援に向かわない選択は許されるべき、また避難支援の最期の時間は患者・入所者から手を放し、救助者自身を救助するために使われるべきである。

【資料】

(1) 番組A NHK「あなたの家族は逃げられますか？

—急増“津波浸水域”の高齢者施設設— (2022/3/18)

<https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/blog/b1/pneAjJR3gn/bp/p6dZDxz141/>

(2) 番組B NHK「海辺にあった、A町の病院 震災12年 石巻市雄勝町 (2023/3/11)

<https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/blog/b1/pneAjJR3gn/bp/p5EzGnko0j/>

(3) 発表スライド等 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/h610.pdf> (右上のQRコード)

